

## 子育ての経験を共有する意義に関する一考察

### A Study of the Significance of Sharing Experiences of Parenting

七星 純子

NANAHOSHI, Junko

#### はじめに

子どもを育てるといふ営みは、私たちにどのような経験をもたらすものなのだろう。子育てには、喜びや楽しさをもたらすが、大きな労苦もある。そもそも子育てには、どんなに支援があったとしても、自分より弱い存在ではあるが自分の手助けを必要としている非対称性の関係性があり、非対称であるがゆえに、その対応の中には相手をどこまで優先すればよいのか、自分をどこまで優先すればよいのかということが常に起こる可能性がある。また、経済性や合理性の価値が高い社会で、非合理で経済性のない営みである子育ての分担をどのようにするのかという調整も大変である。このように、子育ての分担にとらわれ過ぎると男性と女性との関係づくりが難しくなったり、子育てを協力して行うことを諦めてしまったりすることもある。

そこで、本論文では、子育ての経験を共有する意義について考えたい。それは、男女間での子育ての分担の実際ではない。また、親を経験しないとわからないと言いたいわけでもなく、シングルで育てている人や、男女間以外の形で育てていることを考えていないわけではない。しかし、今回は、一人では担いきれず、またこれまで女性がその多くを担ってきた子育てを、とりわけ男性と女性の間でその経験を共有していくことにどのような意義があるのかということに注目したい。そのことを考えるにあたって、子育てが現在どのように行われていて（第1

節）、どのような経験をする営みなのか（第2節）を聞きたい。そのことを通じて子育ての経験を共有する意義について考察してみたい（第3節）。

#### 1. 意識の上での共同化は進んでいるが、女性が多くを担っている子育て

まず、実際にどのように男女間で子育てをしているのかについてみていきたい。厚生労働省の『平成25年版 労働経済の分析』によると「総実労働時間の動きをみると、2011年には所定内労働時間の減少を受け若干減少したものの、2012年には0.5%増と再び増加」（厚生労働省 2013：44）しており、「夫婦と子供の世帯」のうち、末子が6歳未満の夫（父）と妻（母）の「育児」時間をみると、夫は42分、妻は3時間2分となって」（総務省 2012：6）おり、依然として女性が子育ての多くを担っている。

このような男女差がある中で、子育てにおける男性と女性が子育ての何を、どのように行っているかについての報告をみていく。父親と母親の子育ての共同化について調査をした工藤らによると「育児に対する意識については共同化が進んでいる」（工藤ら 2013：23）が、①父親への育児参加意欲はあっても、父親の育児時間に変化がないこと、②それにもかかわらず父母ともに育児協力ができていると感じていると報告しており、共同化は意識の上であり、実際には女性がその多くを担っている。

このような実際の子育てに関わる時間に差がある

中で、男性と女性の間の子育てにおける経験の差がどのようなところにあるのだろうか。子育てを専門で行う乳幼児の母親については、孤独感や虚しさ、社会からの孤立感やそれに伴う焦燥感が報告されており、それらの解消をするためにも、子育て支援センターなどの支援は重要である。しかし、そこで出会う人たちは目的であり、なかなか母親個人としては出会えなかったり、また家の中の「母子カプセル」を抜け出すことができても、向かう先は「女・子どもカプセル」であったり、ときに同質的で、閉塞的であるとも言われている（大日向 2005, 山根 2008）。

また、たとえ男性が子育てに参加したとしても、夫は「乳幼児と遊ぶ」が24分と最も長く、妻は「乳幼児の身体世話と監督」が1時間26分と最も長く（総務省 2012 : 6）、実際に子育ての何に関わるかについての差がある。この傾向は、夫がどのように子育てに関わっているかについての妻へのインタビュー調査（4～6歳の子の親）の中にも見られる。夫の子育ての特質には「楽しみ・趣味としての育児」「受動的育児」があり、さらにもともと子育て参加を求めないという「妻たちの自制」の意識が働いていることが指摘されている（平山 2008 : 175 - 178）。夫に子育て関与を積極的に求めない背景には、「仕事」の大変さ・忙しさがある（と妻たちによって認識されている）ので依頼を躊躇するほか、「育児協力を求めて夫婦げんかになった経験、夫に嫌な顔をされた経験、求めても状況が改善されなかった経験などを通じて、妻たちは夫に期待し求めることをあきらめてしまっている様相がうかがえた」（平山 2008 : 177）という。父親へのインタビュー調査でも、特に片働きの父親は、「子どものため」の意識は充分あるものの、休日の「遊び」に特化せざるを得ず「実際の育児はレジャー中心であり、

父親にとって育児が目的化」していて「父親にとっては癒しの部分」になっているという（斧出 2007 : 29-30）。他の研究では、母親が父親に期待する子育ての内容（子育て : 「世話」「しつけ・教育」「遊び」）についても報告されている。それによると家庭への「収入貢献度が〈低い〉母親は、父親に「遊び」をより強く期待し、一方、収入貢献度が〈高い〉母親はどちらかといえば「世話」を期待」（大和 2008 : 132）する傾向があるという。

このように、男性は①長時間労働により子育てに関わりたくても関われない、②子どもに関わったとしても、「世話」に関わるのが少ないという傾向がある。また、夫への配慮や夫への子育て参加への期待をしなくなる妻もおり、夫が子育て参加を求められなかったりしている。

これらのことより、女性は「世話や監督」を引き受けるために出産後のライフスタイルが大きく変わりがねないが、日本の男性は「世話」に積極的には関わらない（関わりたくても、関われない）傾向がある。男性のライフスタイルは大きくは変わらずに仕事優先的であり、子育てで実際に担っていることは、主に母親が「世話」をし、父親は「遊び」がメインという形で分担されており、男性と女性の間で子育ての経験に差があると考えられる。これらの調査は、子育ての分担にどのような男女差が生じているのか、就労形態等の個人では解決しきれない問題にどのような制度の整備や支援を行っていくのかということに生かすことのできる側面があり、重要な調査である。しかし、子育ての形式的な分担にのみ注目すると、男性批判になったり子育ての負担に注目しがちになったりしてしまう。また、協力して子育てを行うことの難しさがある中、その分担を公平にすること（たとえば子育てに関わる時間の平均化など）を目指し、例えばただ単に外部化するなど

して対応することが、子育てを共に行うことなのかという疑問もわいてくる。そもそも子どもを育てることとは、どのような経験をするものだろうか。そのことについて次の節で考えていきたい。

## 2. 子どもを育てることはどのような経験をするものなのか

ここまで、子育ての共同は意識の上では進んでいるが、子育ての実際はまだ女性が担う部分が多いことや、子育ての中で実際に担っていることに男女差があることを見てきた。このように、日本では意識と実際のズレがある男女間での子育てであるが、そもそも子どもを育てる営みを通して、私たちはどのような経験をするものだろうか。

子育てをすることは人にどのような変化をもたらすと言われているのか。「1990年代に入り、子育てを人間の発達課題として捉える発達心理学的視点が登場した」（藤後 2012：3）と言われているが、「子育てによる親・おとなの発達とは、一言でいえば、自らの変化・成長」（柏木 2011：52）であり、その変化・成長には「柔軟性」、「自己抑制」、「視野の広がり」、「運命と信仰の受容」、「生きがい」、「自己の強さ」（柏木・若松 1994：74）があるという。また、幼い存在への応答性や、感受性、養護性などは「女性・男性の違いをこえて、むしろ、生命をつないでいくために求められる大人としての人間関係能力」（大日向 1996：30）として検討されるよう提唱されてきている。

このように、子どもを育てることが、大人の成長発達や人間関係能力として検討されることにつながることは、子どもとの具体的な関わりが関係しているだろう。柏木は次のように言っている。

「子育ては、弱い者に向き合うケア行為です。

自分本位の思い、態度は子どもには通用しませんし、相手の立場、感情を考えながら行動しなければなりません。その意味で、子どもというのは、まったくの「異質の他者」です。この「異質の他者」に向き合う行為を通して、弱いものへの思いやりの気持ちや姿勢、行動なども身につくことができます。いま、日本は少子化を迎え、一人ひとりが子どもと向き合う機会が減っています。子どもという「異質な他者」と向き合う機会が減少することで、社会全体が弱者への思いやりや、他人への寛容さなどが減ってしまうとしたら、それはとても残念なことです。そうした意味でも、「父親をする」こと（もちろん「母親をする」ことでもあるが：引用者注）は、本人の成長・発達を促すと同時に、社会にとっても大きな意義を持っています。」（柏木 2011：69）

逆に、子どもを自分の分身だと感じることは「育児・家事参加の低い父親でこれが高く」（柏木・若松 1994：80）、そのような父親は、柏木のいう「異質な他者」としての子どもと関わる機会が少なくと考えられる。

これらのことから、子育てという営みは、自分よりも弱く、自分の手助けを必要とする「異質な他者」と出会う経験なのだと言える。その「異質な他者」に具体的に接し、必要なものを提供し、「異質な他者」との関係性を育むことが、大人側の成長・発達につながる。そして、その経験が、子どもを含む弱者とともに生きていくことを支える能力の発達につながり、多様な他者とともに生きていく人間関係能力となると考えられている。

ここまで、子育てに含まれる「異質な他者」と出会い、具体的に関わり、支える営みが、大人個人の成長・発達を促すことについてみてきた。では、子

育てを通して、この「異質な他者」に出会う経験を男性と女性で共有することは何をもたらすのであろうか。

ここでは、生活世界の非暴力な関係を基礎にした平和な文化の創造について提唱している平和学者エリーゼ・ボールドィングの考えを参考にしてみたい。ボールドィングによると、「私たちが今日経験していることは、男性優位文化から男女間のパートナーシップと平等の文化へ」の変わり目の時代で、「このようなパートナーシップは平和的な文化の概念の中核をなす」(Boulding2000:124)とし、この男女間の関係性を変えていくために、子育ての経験の共有をあげている。

「母親であることと、子ども（の要求：引用者注）に対して全面的に満たすことと、時には応じないことにつながりを崩して、基本的な満たす／応じないという経験を配偶者同士で共有すること、一人で世話をする人にとっては友人とその経験を共有することで、男の子たちと女の子たちを自律の方向に育てることが可能になる。なぜならば、子どもたちが、満たすことと時に応じないこと、与えたり与えなかったりすること（子どもへの日々の対応：引用者注）を女性特有の役割として結びつけずに、この地球上の人間の経験の本質の一部分だと認識するからである。」(Boulding2000:131-132)

「男性と女性の間で、育むことと世話をすることの役割 (nurturance and service roles) を共有することでもたらされる成熟さが、より充実していくことで、個人の中にある生物学的な可能性は何でも、ますます開花するのである。」(Boulding2000:133)

これらのことから、ボールドィングは、多様な大人が子どもの要求に応じるか、応じないかという対応をすることで、子ども自身がそのような営みは誰もがするものだとして認識することの重要性と、それにより性別役割の再編につながることを述べている。また、実際に子どもを育み、日常の中の世話をすることで、それらの技術も身に付き、仕事や大人と接する能力以外の能力の開花を言っている。

ボールドィングの意見をまとめると子育ての経験の中の①子どもの要求に対して満たすこと、ときには応じないことという経験、②育むことと世話をすることの役割 (nurturance and service roles)、この二つの共有が親のみならず子どもに与える影響を指摘していると言える。

ボールドィングや柏木らの意見を合わせて考えてみると、「異質な他者」に出会うことと、出会うだけでなく実際に「世話」をすることを共有することが重要だと言えるだろう。「異質な他者」である子どもの要求に応じるか、応じないかということには、その子どもの成長具合や状態などの観察、さらに対応する側の状況の調節や社会通念との関係などがあり、迷いやその選択でよかったのかなど、少なからず葛藤する経験があると考えられる。大人にとっては子どもへの対応を通して、経済活動で有効とされるような合理的対応が時に意味をなさないような、子どもという大人とは異なった視点を持った「異質な他者」との関係性における葛藤の経験を共有することにつながるのではないかと考える。

たとえば、子育てのパートナーが配偶者でよかったことについて調査をした青木は「喜びや楽しさだけでなく、苦労や難しさも含めて育児にまつわる出来事を共有する経験を積み重ねることは、配偶者を育児のパートナーとして欠かせない存在として認識

することにつながる」（青木 2011：107）と語っている。そのため、子育ての経験を共有することもさることながら、それ以上に、目の前の子どもと関わりながら楽しさと苦しさを主たる養育者として味わう。この子育てにまつわる葛藤を通して、子どもやパートナーや身近な人、仕事や社会などの関係性を大事にしなが、他者も自分も尊重する中で、どのように自己決定していくのかという経験を男性と女性で共有することも重要なのではないだろうか。

そのため、子どもを育てる営みには、「異質な他者」との出会いがあり、その他者と関わり、応じなければならぬ状況から生まれる葛藤の経験、それを通して関係性の中で自己決定をしていく経験を共有することが子育てをともに行っていくなかに含まれていると考えられる。

しかし、前述したように現在の男女間の子育ては、意識と実際にずれがあり、子育ての実際は女性がその多くを担っていた。子育ての何を担っているのかにも男女差があり、特に男性は「世話」に関わらない傾向があった。「世話」という日常的な営みに関わることは、「遊び」より「異質な他者」としての子どもに出会う可能性が高いと考えられる。子育てに関わる分量や内容が異なることで、上記のような「異質な他者」を含めた関係性の中で自己決定していくような経験が、男女間で共有されていなかったり、場合によっては分断されたりしていると考えられる。

### 3 子育ての経験を共有することで起こりうる変化／結節点としての子育て

ここまで、子育てには、大人側に成長・発達が促されること、また、「異質な他者」としての子どもへの対応における迷いや葛藤があり、この経験を通して、弱い立場の人も含めた関係性の中で物事を決

定していく経験が子育てには含まれていることを見てきた。現在の男女間での子育ては、意識と実際にずれがあり、上記のような子育ての経験が共有されていなかったり、場合によっては、分断されたりしていると考えられるが、このような子育ての経験を共有することにはどのような意義があるのだろうか。

ボールディングは、前述したように、今日を「男性優位文化から男女間のパートナーシップと平等の文化へ」の変わり目の時代と捉え、このことを家父長社会からパートナーシップ社会<sup>(1)</sup> (Boulding2000：87) への変化としている。また「家父長制の重い手が、子どもたちにいまだに重圧を与えている。子どもたちは、法律上未成年であり、私たちの習慣によって声なきものにされている」(Boulding2000：139)。そのため、パートナーシップ社会への変化には、男性と女性だけでなく子どもと大人の関係の再編成が必要だとしている。

ボールディングは男性優位社会での母親のみの子育ての弊害について次のように述べている。ボールディングによると、家庭の中で男性が長だという文化的な象徴が至るところにあり、それが親業を母親に任せることにもつながり、母親だけに育てられた子どもを再生産し「大人の男性と女性の特性において、永遠に子どもっぽさを残したままにしてしまう」(Boulding2000：130) という。このような問題を解消するために、子どものいる家庭では「子どもが生まれてから共同で子育てをすることやパートナー間で家にいる役割を交互にすること」「子どものいない家庭では、幼児、子どもに対する大人の仲間の計画的な関わり」(Boulding2000：131) が重要だという。男性的なものが優位な社会での母親のみの子育ての弊害を乗り越えるために、子どもと多様な大人の関わりをとりあげている。

次にボールディングによるパートナーシップにつ

いてみていく。「パートナーシップの概念には、責任と問題解決の能力を双方で共有することが大事な前提で、かつお互いに共感することも含まれている」

(Boulding2000 : 146)。「パートナーづくりとは、それが大人同士であろうと、大人と子どもの間であろうとも、責任の共有と尊敬の共有の基礎の上であり、それは、導くものについていくもの、教えるものと学ぶものの役割が変わるがわる起こることを保証する平等な関係にある。よいパートナーシップの関係は、夫婦間であろうが、親子間、職場関係、市民関係であろうとも、互いの育て合い (mutual nurturance) が含まれている」(Boulding2000 : 147)。今世紀の子どもと大人の関係は「大部分で、相互関係を念頭においた共同ではなく、一方通行のケアと保護の方向性の中にあつた」(Boulding2000 : 148)が、ボールディングは「子どもの新しくて、活動者としての役割」(Boulding2000 : 161)に注目している。しかし、子どもと大人のパートナーづくりを現実にしていくときには大きな障害があるという。

「なぜなら、子どもと若者がどれほど多くのことを知っていて、社会的問題解決の点からどのくらい貢献しなければならないかということについて、社会全体の意識がほとんどないからである。また、とても幼い子どもたちですら実際に彼らの周りにいる大人をどんなに〈育てている〉のかという社会全体の意識においても、同じようなギャップがある」(Boulding2000 : 146 - 147)と言っている。子どもと大人の関係についても一方方向でないパートナーシップを提唱している。

これらのことから、ボールディングのいうパートナーシップの関係に含まれているものは①責任と問題解決の能力と尊敬を共有していること②一方的な働きかけではなく相互関係③役割が固定されないこと④互いの育て合い、である。

それでは、ボールディングのいう家父長制社会下と、上記のようなパートナーシップの関係を基礎にしたパートナーシップ社会では、子育てという営みがどのように変化するのかをボールディングの考えを参考にして整理してみたい。

家父長制下では、性別分業により役割の固定が起こる。そのため、それぞれの役割における喜びや労苦の経験が分断されたままとなり、共有されない。さらに、どんなに価値のある労働であっても、同じことの繰り返しにより、孤独となったり、最悪な労働となったりしかねない。

では、パートナーシップ社会の場合はどうであろう。役割をかわるがわる行うために、役割から離れられる、いろいろな役割に携われることにより個人の能力の開花がある。また、同じ役割を他の人とかわるがわる行うことで、経験を共有しやすく共同性が増すと考えられる。役割が固定されないことで、同じことをやり続けるという苦痛の労働になりにくくなる。そのため、子育てという営みの負担の側面に注目するばかりでなく、より共同していく側面を捉えていける可能性がある。

ボールディングの考えから見えてくることは、パートナーシップの中の役割が固定されずに「役割をかわるがわる行うこと」が起こることが、互いの育て合いを可能にし、役割をかわるがわる行えるからこそ、責任・尊敬の共有、共感が可能になるということである。さらに、「役割をかわるがわる行うこと」が、平等に結びつくということである。これらのことから、「役割をかわるがわる行うこと」が平等や責任・尊敬の共有、共感を可能にする要素の一つになると言えるのではないだろうか。

ボールディングによると、男性と女性は異なった社会経験をしているため軍事の問題や原発事故などの深刻な問題が起きたときには異なった反応を示す

ことがあり、互いの経験を共有し分かち合い、互いの最も創造的な特性を引き出し、互いの判断を聞きあうことや対話をする、今がそのはじまりのときだと言っている (Boulding2000 : 136 - 137)。「私たちが必要とするのは、領域の交換ではなく、お互いによる共有である。そのような男性と女性の世界の共有から引き出される社会的方針は、個々の人間の出来ることを新たに発達させることができるだろうし、その方針は維持しやすいものであろう」(Boulding2000 : 138)。また「同時代に生まれたそれぞれの年齢の人たちは、社会のある側面に理解を広げ、一方で、ある側面には理解が乏しい。それゆえ、子どもたち、十代の子どもたち、大人たちは、文字通り異なった世界を経験している。このように異なって経験した世界を、世代を超えて共有することが、全体的な問題を解決していくことに不可欠なのである」(Boulding2000 : 147)。

ボールディングが男性と女性の子育ての経験の共有を扱っていることからみえることは、子育てそのものの問題ではないだろう。一つ目は、男性と女性、大人と子どもの関係の問題が両方おこる場をかえることで、両方の関係性が変わる可能性がある、その結節点として子育てを位置付けていること。二つ目は、その関係性を変化させ「役割をかわるがわる行うこと」が起こることで、それぞれの経験世界を共有し、対話の素地をつくることで、問題を社会化したり、対応したりすることと考えられるのではないだろうか。

「役割をかわるがわる行うこと」で、子育てに含まれる経験や子育てをしながら働く経験の共有につながり、それによる平等や、責任や尊敬の共有、また、それぞれの営みにまつわる苦楽の共感につながる。その平等や責任、尊敬を基礎にし、共感性をもちながら、それまで領域や経験が分断されていた人

の視点を含め、またその視点を軽視することなく、その営みに共に取り組める。「役割をかわるがわる行う」経験の共有が、関係性の結節点である子育ての場に行き起こることで、男性と女性、大人と子どもの関係の再編につながり、それが社会の質の変化への可能性につながるのではないだろうか。

現代は、個人化がすすみ、地域づくりや具体的な人とのつながりをつくることが求められているが、それを創っていくには、共同する経験が大事になる。たとえばコミュニティが破綻したとしても、子育てのような個人では担いきれない営みは、家庭に収まりきれず、育てる側と育てられる側の負担を軽減するには共同せざるをえない性質がある。さらに、その子育ての場は、現代では男性と女性、大人と子どもの関係の結節点としても考えられ、それにより、それぞれの人が経験した世界を性別、世代、領域を超えて、共有できる場ともいえる。これらのことから、「役割をかわるがわる行うこと」の経験の共有ができ、それに伴い性別、世代、領域を超えたそれぞれの人の経験の共有が起こる最小で普遍的な場が子育てにはある。その場のあり方を変えていくことで社会の質に影響をもたらすことが、男性と女性での子育ての経験を共有する意義といえるのではないだろうか。

## おわりに

ここまで、子育ての分担量と内容の男女差の実際、子育てに含まれる「異質な他者」と出会う経験と実際に「世話」をする経験、その経験の共有ができるように「役割をかわるがわる行う」ことの意義についてみてきた。

経済活動が優先される社会では、子育てそのものの意義は見えづらく、ここまでみてきたことは、男女間の子育ての実際の意識と現実のずれへの対応策

にはつながらないかもしれない。子育ての経験の共有の意義を強調することは、家庭回帰や子どもを産まない、産めないなどの女性の抑圧へとつながりかねない。子育ての分担にとらわれ過ぎると男性と女性との関係づくりが難しくなったり、男性批判になったりしやすい。だからといって、両性の経済活動を優先し、子育てを主に外部化し、それに子どもを合わせていくことをどこまでしていいのかという疑問もわく。このようなジレンマが多くあるからこそ、子育ての経験の共有を考えることが、そのジレンマの乗り越えることにつながるのかもしれない。今回は、男性と女性の子育ての経験の共有を主に扱ったが、いろいろなタイプの組み合わせについては取り扱えなかった。平等ということについても考察できていない。また、親子関係に代表されるような濃密な非対称の関係のあり方の再考や家庭外の人も含めてどのように多様な人が関わられるのかなどの検討については今後の課題としたい。

## 注

(1) ボールディングは、パートナーシップ社会について、「a postpatriarchal, partnership society」(Boulding2000:87)としており、脱家父長性としてパートナーシップ社会を位置付けている。

## 参考文献

青木聡子, 2011, 「乳幼児をもつ夫や妻にとって配偶者が育児のパートナーでよかったこと: 自由記述への回答から」『学校教育学研究論集 24』東京学芸大学: 101-110.

大日向雅美, 1996, 「母性をめぐる現状と課題」武谷雄二・前原澄子編『助産学講座 3 基礎助産学 3 母性の心理・社会学』医学書院, 1-33.

大日向雅美, 2005, 『「子育て支援が親をダメにする」

なんて言わせない』岩波書店.

斧出節子, 2007, 「父親の育児に関する意識の諸相—なぜ育児をするのか?」『華頂短期大学研究紀要』(52), 華頂短期大学: 15-32.

柏木恵子, 2011, 『父親になる, 父親をする—家族心理学の視点から』岩波ブックレット No. 811, 岩波書店.

柏木恵子・若松素子, 1994, 「「親となる」ことによる人格発達: 生涯発達の視点から親を研究する試み」『発達心理学研究』第5巻第1号, 一般社団法人日本発達心理学会: 72-83.

工藤英美・山本理絵・望月彰, 2013, 「父親と母親の育児の共同化の実態と課題—全国調査(保育・子育ての3万人調査)の経年比較より」『人間発達学研究 第4号』愛知県立大学大学院人間発達学研究科: 9-24.

藤後悦子, 2012, 『中学生のナーチュランスを形成する発達教育プログラム』風間書房.

平山順子, 2008, 「妻からみた「夫の子育て」 趣味としての育児」柏木恵子・高橋恵子編『日本の男性の心理学—もう一つのジェンダー問題』有斐閣: 174-178.

大和礼子, 2008, 「母親は父親にどのような「育児」を期待しているか?」大和礼子・斧出節子・木脇奈智子『男の育児・女の育児—家族社会学からのアプローチ』昭和堂: 115-135.

山根真理, 2008, 「「次世代育成支援」時代の母親意識 母たちの意識は変わったか?」大和礼子・斧出節子・木脇奈智子編『男の育児・女の育児—家族社会学からのアプローチ』昭和堂: 69-89.

Elise, Boulding; with a foreword by Federico Mayor, 2000, *Cultures of peace: the hidden side of history*, New York: Syracuse University Press.

厚生労働省, 2013, 『平成 25 年版 労働経済の分析  
— 構造変化の中での雇用・人材と働き方』  
(<http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/roudou/13/13-1.html>).

総務省, 2012, 『平成 23 年社会生活基本調査 詳細  
行動分類による生活時間に関する結果 結果の概  
要』 (<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2011/pdf/houdou3.pdf>).

七星 純子 (千葉大学大学院  
人文社会科学科博士後期課程)